

統合失調症の多飲症患者に対する看護と 認知行動療法の効果に関する文献検討

茂木 泰子・野崎 裕之・相場 繁

和文抄録

目的：統合失調症の多飲症患者に対する看護と認知行動療法の効果を明らかにする。

方法：文献研究（国内文献は、医学中央雑誌 Web 版及び CiNii、海外文献は Pubmed を対象とし、キーワードは統合失調症、認知行動療法、多飲症、精神看護として検索した）

結果：国内文献 37本 海外文献 0本

考察：国内論文においては、約10年を遡って検討した結果、統合失調症と多飲症症状、認知行動療法を用いた研究は3件であった。この3件の認知行動療法については、幾つかの方法論があり、問題解決療法とした基本理論をもとに認知行動療法として扱っているものもあった。結果、患者は多飲行動に対し、飲水量や体重の増減が視覚化されたデータを認識し、飲水制限ができるようになり、達成感を得ていたようだった。さらに、看護師との関りから自尊感情が低いとされる統合失調症の患者が、自信をもつことで自己効力感を高めることにつながったと推察できる。

英文抄録

Objective: To clarify the effects of nursing and cognitive behavioral therapy on polydipsia patients with schizophrenia

Method: Literature review (domestic literature was searched for Ichushi-Web and CiNii, overseas literature was for Pubmed, and the keywords were schizophrenia, cognitive behavioral therapy, polydipsia, and psychiatric nursing)

Result: There were 37 domestic documents and no overseas documents.

Discussion: In domestic papers, as a result of examining during these 10 years, there were 3 studies using schizophrenia, polydipsia symptoms, and cognitive behavioral therapy. There were several methodologies for these three cognitive behavioral therapies. These methodologies were treated as cognitive behavioral therapies based on the basic theory of problem-solving therapies. As a result, polydipsia patients recognized the data that visualized the increase/decrease in water consumed and body weight, controlled to drink water, and had a sense of accomplishment. Furthermore, the relationship with nurses let patients with schizophrenia to get more confidence and self-efficacy.

キーワード

統合失調症、認知行動療法、多飲症、精神看護

Schizophrenia, Cognitive Behavioral Therapy, Polydipsia, Psychiatric Nursing

I. 序 論

2019-2020年の国民衛生の動向によれば、平成12(2000)年の全精神病院在院患者数は333,328人であり、以降、平成29(2017)年までに285,947人が入院している。病床利用率は93.0%から85.9%であり、わずかながら病床の空き状況に変化がみられている。また、平均在院日数は平成元年では488日であり、約30年を経過した平成29年には268日となっている。その中でも疾病別内訳では約5割が統合失調症で大きな変化はない。

長期入院の統合失調症患者の中には、陰性症状を呈する場合があります、対人関係の障害や自尊心の低下などにより、社会復帰を阻害する要因の一つともいわれている。さらに、統合失調症で長期入院している患者の約1～3割には多飲症や水中毒症状を呈するといわれており、嘔吐や意識混濁まで引き起こす電解質バランス異常となると生命にかかわる重篤な症状を呈する場合もある。

厚生労働省によれば、うつ病の認知療法・認知行動療法治療者用マニュアルなどの作成により、うつ病をはじめ、不安障害やストレス関連障害、統合失調症などの精神疾患に対する治療効果と再発予防効果を裏づける優秀なエビデンスが多く報告され、欧米を中心に世界的に広く使用されるようになったと紹介している。また、認知行動療法について、「認知療法」は認知再構成法を行い、「行動療法」は、行動活性化、問題解決療法、アサーションという方法があり、精神疾患以外でも、日常のストレス対処、夫婦問題、司法や教育場面の問題、などその適用範囲は広がりを見せている、としている。

このような状況の中で、統合失調症は、うつ病と共に2大精神病といわれている重要な疾患の一つである。これまで、統合失調症の多飲症患者の看護援助は未だ確立されておらず、個々の患者に対して対症法的な看護援助を行っている現状であり、適切な看護援助の確立が求められている。認知行動療法はうつ病に有効であると証明されており、統合失調症にも有効であるとしている。その為、本研究では認知行動療法(Cognitive Behavior Therapy: CBT)について再度確認し、統合失調症の多飲症患者に対する何らかの効果が得られるのではないかと考え、その可能性を探ることを目的に文献検討をおこなうこととした。

II. 本 論

1. 目的

統合失調症の多飲症患者の看護は薬物療法や生活療法の援助をはじめ、各施設において工夫がなされ、現在に至っている。しかし、決定的な看護援助は未だに明らかにされておらず課題は大きい。そこで、統合失調症の多飲症患者に対して認知行動療法の効果が期待できるのではないかと、という疑問から、統合失調症の多飲症患者と認知行動療法の関わりを中心に有効な看護援助を考え、精神看護における統合失調症の多飲症患者に対する認知行動療法の動向とその効果について明らかにする。

用語の操作的定義：認知行動療法とは、認知療法や行動療法、認知行動療法的かかわり、などの表現もキーワード検索上、認知行動療法と書かれているものとする。

2. 方法

1) 対象

国内文献について、医学中央雑誌 Web 版、CiNii、海外文献について Pubmed で検索し、統合失調症、認知行動療法、多飲症、精神看護のキーワードで検索した。

2) 倫理的配慮

公開されている論文を用いて、著者の権利を侵害しないよう出典を明らかにした。

3. 結果

1) 検索結果

キーワード検索で得られた国内の論文は 76 本であり、そのうちの関連性のあるもの 32 本を分析対象とした。海外の論文は、統合失調症、認知行動療法で 75 本検索できたが、多飲症を含めると 0 本になった。

2) 国内文献の分析結果とその分類

本調査の結果、国内文献は以下に示す 3 つの項目に分類できた。

(1) 統合失調症の患者の問題行動に関する認知行動療法について（25 本）

- ① 思考や感情などの精神的なものとして、長坂ら (2013) や小林ら (2012)、浦部ら (2016) や荒木ら (2016) の、幻聴や妄想などの強い統合失調症患者への認知行動療法を行ったものがあった。また、寺本ら (2014) や二葉ら (2014) の自尊心の低下や自己否定の強い患者、浦崎 (2014) や吉田ら (2015) の不安の強い患者に関するものがあり、さらに、石川ら (2014) のアンダーコントロールに関するものなどであった。
- ② 日常生活行動に関するものでは、只野らの (2010) の金銭管理の問題があったり、杵築 (2010) の薬のアドヒアランスに関するもの、小島ら (2014) の禁煙指導に関するものであったり、坂本ら (2014) の衣類の購入拒否の患者や川瀬ら (2014) の手洗いがやめられない脅迫症状の中で日常生活における困難があったりするものであった。
- ③ 比較研究や縦断研究などに関するものには、紅林 (2015) の比較研究や加藤ら (2017) の縦断的介入研究など、数人から数十人を対象としていたものであった。

(2) 認知行動療法の説明や動向（5 本）

- ① Beck の認知行動療法について医療者向けと家族向けなど、基本的な認知行動療法を説明しているもの
- ② 認知行動療法の理論そのものや意見として述べているもの

(3) 統合失調症を含む多飲症患者に対する認知行動療法を用いた看護援助（3 本）

- ① 原ら (2011) は、多飲症患者へのかかわり方として多飲行動のある 4 名の患者（統合失調症 2 名、発達遅滞 1 名、てんかん性精神病 1 名）を対象に 認知行動療法と心理教育を

取り入れたプログラムを週1回45分間実施した。看護師は体重増加状況と行動パターンを観察しながら、体重測定と飲水量、飲水方法を振り返り、看護師は統一した姿勢で関わり確認した。結果、4名が持つそれぞれの課題が改善されていた。患者と看護師関係が、多飲行動にはしるストレスの軽減と自己効力感を高めることに関連することを示唆していた。

- ②松島ら(2015)は、多飲症患者に対する認知行動療法的介入では、1名の統合失調症の患者を対象に体重測定の自記式記入とグラフの作成、飲水行動に対するコップの大きさや氷をなめるなどの水分量の調整、検査データを指標に指導を行っていた。結果、患者自身が自分の行動に対する変化が可視化され、達成感を感じ意識の変化があったとしている。
- ③村島ら(2020)は、行動療法にて多飲症が改善した事例における自己効力感に着目した看護師の関わりを述べていた。目的は行動療法により、多飲症が改善した事例を振り返り多飲症患者の看護の示唆を得ることであった。対象は統合失調症の患者であった。方法は主に体重測定と飲水量の管理を行い、グラフで可視化した。また、看護師は患者の認知や行動の変化、それらに関連した看護師の関わりを時系列に記録しコード化していた。結果、看護師の有効なフィードバックにより、自己効力感も高まり、飲水管理ができるようになった。

4. 考察

国内論文においては、約10年を遡って検討した結果、「統合失調症」と「多飲症症状」、「認知行動療法」を用いた研究は3件しかなく、現時点までは研究として多くは扱われていないことが分かった。また、認知行動療法には、幾つかの方法論があり、問題解決療法とした基本理論をもとに認知行動療法として扱っているものもあった。丹野(2014)によれば、認知療法を実施しているのは、73.0%が臨床心理士であり、医師は20.3%、ソーシャルワーカーが13.5%、看護師が関わっているものは1.4%であることを報告している。本研究で対象とした、認知行動療法を扱っている32本の論文の中に今一つ理解し難かったものがあったが、複数の職種が関わっており看護師としての援助記録に全てが示されていないために理解し難かった、と推察された。本研究をすすめる過程で確認されたのは、統合失調症の患者の問題に対し、個別対応を中心に計画的に、一貫性のある関わりをもち、可視化された介入を行っていたことだった。その結果、患者はそれぞれの問題に向き合うことで達成感を得ていたようだった。これらのことは自己効力感を高め、自尊心が低いとされる統合失調症の患者の自信につながったものと推察できる。また、2014年までは、認知行動療法に対する看護研究が比較的多く行われてきたが、村島ら(2020)のように、看護師の行動をコード化したり、分析したりするという手間がかかり、容易ではないことも推察された。さらに統合失調症で多飲症症状を呈する看護援助については、川上ら(2010)の信頼関係や肯定的な関わりなどの報告からも変化していったものと考えられる。

これらの多飲症患者の一般状態の観察では、主に体重測定と日中の行動の観察があげられ、飲水量や体重の増減を可視化することで、患者に明確な根拠を示して指導することができたと考え

られる。また、飲水時の工夫では、「水を渡すことで摂取時間をかけたり、看護師との会話の時間ができたり」といった具体的な手段があった。看護師が患者に対し日常生活の場面から水を飲み過ぎないように指導し、患者との関係性に着目していた。これは、茂木(2013)の「看護師との関係性」に一致するものであった。患者—看護師関係において一貫性をもって関わることは自我障害のある患者に対して有効な手段の1つとなっていたと考えられる。

以上のように様々な認知行動療法によって援助が行われていたことが分かった。川上ら(2010)は、行動観察をはじめとする日内体重変動率(Normalized Diurnal Weight Gain: NGWG)を用いる方法を踏まえた体重測定や血液・尿検査などを主に身体に関わる援助や心理療法、家族教室などの幾つかの方法を組み合わせ実施し、成果をあげている。また、Nowak, L., et al.(2016)は、思考内容と思考の変化に焦点をあてた従来の認知行動療法(CBT)と、「第3世代」といわれている思考のコンテキスト(文脈)や、機能を調整することに焦点を合わせたCBT介入について述べており、一部では陰性症状、機能の改善傾向が示されていたという結果だった。CBT「第3世代」の考え方は、思考内容とその思考過程に着目しており、脳機能に直接かかわる過程の重要性を示していた。さらに三田村(2017)は、「第3世代」の考え方について、実証的な心理療法であり、「症状の問題」から「生き方の問題」に変化しており、ACTでは「アクセプタンス」と「価値あるアクション」ということを述べている。近年では、日本国内でも「第3世代」の考え方にもとづくマインドフルネスやアクセプタンスという考え方も広まっている。

海外において、多飲症患者に関する研究は見られなかった。統合失調症患者へのCBTについて、英国国立医療技術評価機構(National Institute for Health and Care Excellence: NICE)の統合失調症患者への治療ガイドラインによると、急性期の症状に効果があるというエビデンスをもとに、標準的な薬物療法に加えてCBTを実施することが推奨されている。一方、Laws, K. R., et al.(2018)は、統合失調症に対する認知行動療法に関するメタアナリシスを行い、陰性症状の時期や退院指導については明らかな有効性を示すことについて、十分なエビデンスは得られていないと述べている。これらが、海外における統合失調症患者へのCBTの効果を示していると考えられる。

CBTによる介入を行うことは、認知のゆがみに働きかけることである。統合失調症の正体は自我障害ともいわれ、自我がぐらついている患者にとって、明らかな効果を示すには困難があるのかもしれない。自我障害のある多飲症患者に対し、薬物療法をはじめ、CBTや心理療法など、複数のサポートシステムを使って支えることで、統合失調症の多飲症患者の看護の確立を目指すことができるのではないかと示唆された。

III. 結論

今回、統合失調症の多飲症患者に対する認知行動療法について、国内の文献は3件であり、今後も検証をしていく必要がある。また、海外文献については、統合失調症の患者に対する認知行動療法は行われていたが、急性期における有効性は明らかにされていたものの、その時期を過ぎると明らかな根拠を示すものはなかった。しかし、統合失調症と診断された人々の追加治療とし

茂木泰子・野崎裕之・相場 繁：統合失調症の多飲症患者に対する看護と認知行動療法の効果に関する文献検討

て、英国国立医療技術評価機構（NICE）によって推奨されている認知行動療法（CBT）がしめされており、さらなる研究が求められる。

IV. 今後の課題

今回の研究結果から、統合失調症で多飲症の患者に関する認知行動療法の成果が得られた論文は3件のみであった。今後は認知行動療法を含む幾つかの方法論を組み合わせた看護援助を検討していく必要がある。

当該研究の遂行や論文作成において、開示すべき利益相反状態はない。

文献

- 荒木学, 山本克子(2016)：被害妄想を抱きやすい統合失調症患者に対する認知行動療法的看護介入の効果, 日本看護学会論文集：精神看護, **46**, 51-54
- 二葉昌伸, 松下昌平, 峯岡香奈, 他(2014)：悲観的思考をもつ患者へのアプローチ 看護師が行う認知行動療法の実践から, 日本精神科看護学術集会誌, **57**(1), 304-305
- 原和仁, 上小澤実香, 青木華江, 他(2011)：多飲症患者へのかかわり方 患者の「飲みたい」思いを受け入れる, 日本精神科看護学会誌, **54**(1), 192-193
- 一般財団法人 厚生労働統計協会(2019)：国民衛生の動向 2019/2020, 一般財団法人 厚生労働統計協会, 東京
- 石川愛, 飯島真吾, 原和仁, 他(2014)：怒りの本質への気づきを促すアンガーコントロールトレーニングの有用性, 日本精神科看護学術集会誌, **57**(1), 546-547
- 加藤宏公, 中戸川早苗, 古田加代子, 他(2017)：認知療法プログラムに参加した慢性妄想型統合失調症患者の精神症状に関する主観的体験の認知の構造の変化, 愛知県立大学看護学部紀要, **23**, 67-75
- 川上宏人(2010)：多飲症の程度に合わせてNDWGを用いて管理する方法, 川上宏人・松浦好徳編, 多飲症・水中毒一ケアと治療の新機軸 (第1版第1刷), 194-198, 医学書院, 東京
- 川瀬祥文, 上野まゆみ, 矢野陽子(2014)：強迫症状のある統合失調症の患者に認知行動療法を試みて, 日本精神科看護学術集会誌, **57**(3), 236-240
- 杵築大輔(2010)：服薬に否定的感情をもつ患者へのパンフレット使用の効果, 日本精神科看護学会誌, **53**(2), 199-202
- 小林伸之, 大坂則子, 梶川大輔, 他(2012)：命令幻聴のある患者に認知行動療法を試みての考察, 日本精神科看護学術集会誌, **55**(1), 442-443
- 小島朗, 永島幹子, 伊田けい子(2014)：長期入院患者への認知行動療法を用いた禁煙の試み, 日本精神科看護学術集会誌, **57**(1), 410-411
- 厚生労働省：うつ病の認知療法・認知行動療法治療者用マニュアル, Retrieved from: <https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaioken/kokoro/dl/01.pdf>. (検索日：2020年6月27日)
- 厚生労働省：精神疾患のデータ, Retrieved from: <https://www.mhlw.go.jp/kokoro/specialty/data.html>. (検索日：2020年11月14日)
- 紅林佑介(2015)：統合失調症患者における精神症状と認知機能に関する研究 外来通院中の患者と入院中の患者の比較検討, 杏林医学会雑誌, **46**(1), 11-26
- Laws, K. R., Darlington, N., Kondel, T. K., et al. (2018): *Cognitive Behavioural Therapy for schizophrenia - outcomes for functioning, distress and quality of life: a meta-analysis*, BMC psychology, **6**(1), 32
- 松島磨悠, 井上朗, 毛利裕子(2015)：多飲症患者に対する認知行動療法的介入, 日本看護学会論文集：精神看護, **45**, 91-94
- Slideshare 三田村仰：認知行動療法 一第3世代の登場で何が変わったのか?, Retrieved from: <https://www>.

- slideshare.net/MitamuraTakashi/ss-71023291. (検索日: 2020年11月14日)
- 茂木泰子(2013): 統合失調症の多飲症患者の特徴とその構造. *ヘルスサイエンス研究*, **17**(1), 81-84
- National Institute for Health and Care Excellence: Psychosis and schizophrenia in adults: prevention and management. Retrieved from: <https://www.nice.org.uk/guidance/cg178>. (検索日: 2020年11月8日)
- 村島正俊, 瀬戸秀文, 藤原大樹(2020): 行動療法にて多飲症が改善した事例における自己効力感に着目した看護師の関わり, *日本看護学会論文集: 精神看護*, **(50)**, 31-34
- 長坂新吾, 大坂直文(2013): 初発の統合失調症患者への認知行動療法 病気と上手に付き合いながら生活できるように, *日本精神科看護学術集会誌*, **56**(1), 506-507
- Nowak, I., Sabariego, C., Świtaj, P., et al. (2016): *Disability and recovery in schizophrenia: a systematic review of cognitive behavioral therapy interventions*, *BMC Psychiatry*, **16**, 228
- 坂本恵, 千葉順子(2014): 妄想により衣類購入を拒んでいた統合失調症患者に対するかかわり 認知行動療法的アプローチを試みて, *日本精神科看護学術集会誌*, **57**(2), 316-320
- 只野敬子, 内野利昭(2010): 長期入院の統合失調症患者の金銭管理 認知行動療法の1技法である問題解決法を使用して, *日本精神科看護学会誌*, **53**(3), 85-89
- 認知行動療法を学ぼう / 東京大学大学院総合文化研究科認知行動科学丹野研究室: 認知行動療法への3つの誤解—エビデンスをあげて反論する—, Retrieved from: http://tannoy.sakura.ne.jp/cbt_metaanalysis.pdf. (検索日: 2020年6月27日)
- 寺本彰文, 高木光稀(2014): 自尊心が低下している統合失調症患者に対する看護 認知行動療法的アプローチを試みて, *日本精神科看護学術集会誌*, **57**(1), 310-311
- 浦部省吾, 斉藤節子, 永川達也, 他(2016): 自己否定の強い患者への認知行動療法の有効性 認知再構成の中で, 心が動いた1症例を通して, *日本精神科看護学術集会誌*, **59**(1), 428-429
- 浦崎久美子(2014): 5年間治療中断し措置入院となった統合失調症患者の退院支援 帰りたい・帰せない・帰してあげたい, *日本精神科看護学術集会誌*, **57**(1), 456-457
- 吉田文彦, 松尾美果, 井上みかえ, 他(2015): 統合失調症患者へ認知行動療法を試みて 認知行動療法から見えてきた好機, *日本精神科看護学術集会誌*, **58**(1), 516-517

(もてぎ やすこ / 精神看護学)

(のざき ひろゆき / 精神看護学)

(あいば しげる / 公衆衛生学・臨床研究・疫学研究)